

医療現場での経験を生かす経営管理と

人と地域の未来を育む農業を目指す



株式会社カネイファーム  
(徳島県藍住町)

専務取締役

矢野望美さん

医療現場での経験をもとに

徳島県の中央を流れる吉野川。その下流北岸に位置する藍住町と言えば、伝統的な藍染料「<sup>すくも</sup>藍」の産地として江戸時代から知られる土地柄だ。ここ藍住町で、水耕栽培によりフリルレタスなどの野菜作りをしている株式会社カネイファーム。専務取締役の矢野望美さん(45歳)は、従業員が安心して長く働ける職場づくりに取り組んでいる。

実家も農家だった望美さん。後に夫となる正英さん(49歳)から「水耕栽培を始める」と聞いた時には「何なのそれは!」と驚いたという。「ただ、自分の仕事が忙しくて、ちゃんと考えられませんでした」と振り返る。それというのも、当時、望美さんは、看護師として県立病院に勤務していたからだ。

正英さんが、経営の安定化を図るため、父親のナシ栽培から水耕栽培での葉物野菜に切り替えたのは2005年。当時、水耕栽培はあまり知られておらず、正英さんは、生産物を持って、スーパーやらホテルやらを駆けずり回って、取引を提案した。人気に火が付いたのは、お弁当の仕切りにフリルレタスを入れると、おしゃれに見えるのと評判になったこと。県内のスーパーはほぼ取引先という好調な滑り出しで、ハウスを拡大していく。

10年に、体調を崩して病院を退職した望美さんは、自然と栽培に目がいくように



p17: フリルレタスのハウスで。矢野望美さんは笑顔が絶えない  
p18: スタッフたちと。女性スタッフは全員ベトナムから(上段・中段左) 右からフリルアイスレタス、クラウドレタス、レディレタス。手前は人気のサンチュ(中段右) 土好きスタッフのために揃えた農機具(下段左) 出荷準備中(下段右)

なつて、種まきや収穫が、まあまあ感覚で行われていることに驚いた。

「病院だったらドクターから指示が下りて、看護師が指示通りに処置し、薬剤師が薬を出します。責任の所在が明確なのに、うちでは野菜が育たなくても採れなくても、責任の所在は曖昧だったんです。見ていられなくて、事務手続きを少しずつ変えていきました」

請求書は手書き、給与も現金手渡しだった。正英さんに代わって、まずは給与計算や納品のソフト導入に踏み切った。

## 長く働けるための人材育成

次に取り組んだのは、栽培記録を付け、計画を立てて全体を管理すること。

「ちょうど第1子が生まれる時で、家にも状況把握したいと思い、タブレットを活用することにしました」

まだガラケーの時代だったから、タブレットの導入は英断だったが、従業員が担当するハウスの生育や出荷状態など日々の状況をクラウド上で報告してもらうことで、

望美さんは子育てしながら指示を出すことができた。

正英さんは、どんどんハウスを増やしていくので、軸となるスタッフの必要性を感じて正社員を採用することを決断。2013年には個人経営を脱却して法人化に踏み切った。

特に出荷が忙しいのは夏だが、「従業員を長く雇って育てていきたい」という思いから、パートタイマーの年間契約を開始した。子育て中の女性が多かったので、要望や意見が噴出して、まとめるのは大変だったそうだ。

「従業員一人一人と話をし、ルール作りをしていきました。子どもの行事で休む場合は、収穫作業を前後にずらすことを提案したり、仕事も時間も各自で決めるようにアドバイス。幸い水耕栽培で、収穫量を調整できるので、臨機応変に行動するように指示できました」

加えて、生産部、出荷部と、作業分野を明確化。栽培や出荷のリーダーや財務などを統括するマネージャーなど、部署ごとに現場管理者が責任を持って担う体制を新たに構築していった。

この人材育成が、思いがけず功を奏したのは、望美さんが第3子を出産した時。同時に折あしく正英さんが入院し、2人とも現場に不在だったが、難なく会社は動き続けることができた。

一時期には、パートタイマーを入れて従



て、さすがの望美さんも、事務をこなすことに限界を感じていた。

そこで思いついたのが、勤怠管理ツールを活用した新手法。従業員の出勤勤データは、即時に社会保険労務士に届くようになっていたので、そのデータを給与明細に反映できるように要望。社会保険労務士が方策を考え込むほど、当時は画期的な提案だった。

「ITツールを活用して仕事がやりやすくなるように工夫していくのが好きなんです」

19年頃から日本人のパートタイマーが集まらなくなり、以降ベトナムの女性たちを雇用してきた。望美さんは、彼女たちをちゃんと育てていこうと決意する。

さらに、10年間勤務している男性スタッフの、JGAP指導員資格を取得したいという希望を応援したり、もう1人のスタッフが土と機械が好きなことを知って、新たに土耕部門を立ち上げた。

目標は人と地域を育てること

事務に関しては望美さんから戦力外通告を受けている正英さんだが、先見の明の持ち主で、カネイファームとは別に、徳島県内の野菜を全国に発信する株式会社菜々屋を仲間達と立ち上げ、新しい農業の在り方を求めてきた。

さらに2019年に、就労継続支援事業所、株式会社チームカネイを設立。「産後、休む暇なく、私が管理者の資格を取りに行っただんです」と望美さんは笑う。

農作業のスキルを教えて農作業ができる人たちを増やすことが目的で、そこから8人が卒業し、農業法人などへ就職。カネイ

現在、2人が新たに夢中で取り組んでいるのは、徳島県産スダチの復興だ。スダチは、さわやかな芳香と酸味が特徴のかんきつ類。日本一の生産量を誇っていたはずだったが、生産者の高齢化や過疎化によって、減少の危機に瀕していることが判明したのだ。

「当たり前にあるものと思っていたので、  
衝撃を受けたんです」

神山町などの山間部で栽培・収穫されてきたが、根本から発想を転換して、町の平地で育てるという。搾って加工することを目的とするため、ワイン用ブドウの栽培に倣った妙案なのだ。

「加工用なら誰でも収穫できます。枝ごと切って室内に運べば、重度の障害のある人たちも作業ができると話しています」

スダチ再生プロジェクトは、徳島県、各市町村、農業委員などの他、耕作放棄地を開墾する重機のリース会社など異業種も加えたパズルのようなプロジェクト。それをプレゼンするためのグラフィックを制作したのは、もちろん望美さんだ。一目瞭然、プロジェクトの目的と志が理解できる。

「結局、やっているのは育てることなんです。従業員を育てる、障害のある人を育てる。農家を育てる。農業を通して適材適所に人と地域を動かすことが、将来花開くことにつながると思うんです」

噛みしめるように望美さんが語った。

（片柳草生／文 藤井大介／撮影）